

檻（おり）

きみのためにわざわざあつらえた檻は
きみの気に入るはずだった
金棒（かなぼう）はあいだが離れているから陽がさしこむ
そよ風はきみの頬をくすぐる
雨粒だってきみの腕をすべり落ちる
そのうえ食事は特製だし見張りは唄うたいだ

けれどきみは満足じゃなかったんだ
檻の横の縦（もみ）の樹とつる豆の芽に
きみはわたしに話しかけるよりも
もっと甘くもっと熱っぽく
囁（ささや）きつづけたにちがいない
枝を垂らしつるを伸ばして 檻をまるきり隠してしまうように

きみは狸と穴熊に呼びかけて
わたしには決してしなかったように
そのごわごわの背や腹や鼻づらを撫ぜ
わたしがきみのために料理（つく）った食べものをわけてやり
穴を掘らせた

そしてわたしを知らずに魅了してしまったように
わたしに見張りを命じられた駒鳥を
何の苦もなく誘惑したのだろうか？
だからあの赤胸の小鳥は
きみがいなくなつた後も変わらぬ唄を唄い続けた

きみのからだを捕えたと
愚かにもわたしは安心していただけなのに
きみは行ってしまった 去ってしまった
空っぽの檻と
からっぽのわたしをただ残し

